

## オリゲネス研究の刊行と東日本大震災

出村 みや子

## I

「オリゲネス研究の刊行と東日本大震災」というこの表題は、博士論文に基づく著書の刊行と東日本大震災を仙台で経験したことを中心に、最近の所感をエッセーに記して欲しいとの鶴岡賀雄先生からのご依頼によるものである。私は昨年6月に、これまでの研究の集大成となる『聖書解釈者オリゲネスとアレクサンドリア文献学——復活論争を中心として』（知泉書館）を刊行したが、校正作業の最終段階で東日本大震災が起こったために校正どころではなくなった上に、製紙会社の被災により出版事情が悪化して本書の刊行も一時は危ぶまれた。何とか早期の刊行にこぎつけたことは真に幸いであった。

アレクサンドリアの聖書神学者オリゲネス(185-254頃)の復活論を中心に、聖書の復活の記事をいかに解釈するかという問題をめぐって教会史上展開された様々な論争を考察したこの書は、ある意味で過去の失われた文化的伝統を現代の視点から甦らせる試みである。

実際オリゲネスをめぐる論争の研究は、異なる宗教・文化的伝統の平和共存を模索する現代世界への重要な指針を提供するものとなった。さらに千年に一度とも言われる規模で東北地方を襲った3.11の大震災を経験した時期に、死と復活の問題を主題とした研究を刊行することの意味について改めて自らに問う機会ともなった。自然災害や人々の争いが、それまで人類が築いてきた文化の営みを一瞬にして破壊してしまうことはこれまでの歴史が教えるところではあるが、古代アレクサン

ドリアで生み出された文献を私たちが読むことは、過去の人々の知的営為が時代と地域を超えて文化的遺産として人類に継承され、その後の新たな歴史を創造していくことを私たちにはっきりと確信させるものである。復活の問題には、こうした伝統の継承をめぐる人類的希望が含まれていることは重要である。

『聖書解釈者オリゲネスとアレクサンドリア文献学』は2009年度に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した学位論文に手を加えたものであり、オリゲネスがパウロに依拠して復活に関する論争をどのように展開したかを、当時のアレクサンドリアの文献学的伝統との関連で論じた研究である。オリゲネス研究に着手したのは1980年に東大宗教学の修士課程に入った時からであるので、研究に一区切りつけるまでに30年以上かかったことになる。オリゲネス研究は彼の主著である『ケルソス駁論』の翻訳と注釈作業をすすめながら国内外で開催される学会における研究発表を重ねていく形でなされたが、この時代の宗教思想の研究には古代哲学やヘレニズム諸宗教、聖書学、教会史などの知見が必要であったために、こうして一つの研究に結実するまでに多くの時間を要した。今回博士論文の審査をお引き受けいただいた宗教学研究室の鶴岡賀雄先生、市川裕先生をはじめ、大貫隆先生、佐藤研先生、宮本久雄先生の五人の諸先生方にはいずれも大学院時代から親しい交わりと研究上の導きをいただいております。審査の際に厳しくも貴重なご助言をいただくことができたことは望外の喜びであった。これまで

多くの諸先生方にお世話になり、この場を借りて再度謝意を表したいと思う。

## II

『聖書解釈者オリゲネスとアレクサンドリア文学』の目的は、古代地中海世界有数の文化都市アレクサンドリア生まれのオリゲネスの意義を、彼自身のテキストに基づいて再評価することにある。特にオリゲネスが著作活動を行ったアレクサンドリアの多文化主義的状况を視野に入れて、ヘレニズム諸思想、グノーシス主義諸派、ユダヤ教との競合関係の中で生み出されたオリゲネスの復活論の成立と特徴を、彼の聖書解釈の方法に焦点を当てて検討することにある。オリゲネスが著述活動を行った古代アレクサンドリアは、古代哲学や宗教思想、文献学や自然学的探求が十全に開花した文化都市であり、様々な民族と文化の伝統が混在する多文化都市として繁栄したものの、4世紀におけるローマ帝国の宗教政策の転換や教会政治の問題、この都市を襲った大地震などの自然災害を通じてその伝統が失われていた。近年フランスの捜査隊により海底に沈んだプトレマイオス朝時代の遺跡が次々と発掘されて都市の全貌が徐々に明らかにされ、今世紀初頭にはユネスコによるアレクサンドリア図書館の再興事業が完成する中で、古代地中海世界において稀有な文化的繁栄を画した古代都市アレクサンドリアに現在世界中の関心が集まっている。

本書には、それまで行ってきた文献学的研究に加え、私が2008年11月19-26日にカイロとアレクサンドリアを訪れた現地調査の成果も反映されている。エジプト滞在に際しては先輩の塩尻和子先生より、アレクサンドリア大学でギリシア・ローマ芸術を専攻した後、日本で語学研修をした経験がある現地の女性をご紹介いただき、それまでは文献上でしか知

り得なかったセラピス神殿跡や新アレクサンドリア図書館、市内のコプト教会、カタコンベ、さらにフィロンの伝えるマレオティス湖周辺や、砂漠の中に突如現われる世界遺産のアブ・ミーナ遺跡などを訪ねることができた。著書の巻頭にはその時に撮影したカラー写真を23枚程収録することができたが、本を読んで感想を寄せてくれた友人・知人の中には、本書の内容は専門的で難しいが、これらの写真はそれまで目にする機会がなかったゆえに興味深いと言ってくれることが多く、これまで日本ではあまり注目されることのなかった古代アレクサンドリアの優れた文化的伝統を紹介する機会ともなったと思う。

以下に著書の内容を簡単にご紹介したい。まず第一章でオリゲネスの聖書解釈の方法を、古代アレクサンドリアの宗教・文化的状況との関連において検討した。オリゲネスが神学的活動を行ったアレクサンドリアは、かつて「学問のコスモポリス」として古代図書館を中心とした文学の一大発展地であり、オリゲネスの時代には諸宗教や思想が競合する多文化主義の様相を呈していた。オリゲネスが採用したアレクサンドリアの文献学的方法是、本文の確立と「ホメロスをホメロスから解釈する」テキスト内在的な解釈で知られており、オリゲネスは聖書を聖書によって解釈する聖書の内在的解釈法を確立した。彼はこうした聖書の解釈法をパウロの聖書解釈の範例(ガラテヤ書4:21-24)に基づいて聖書の霊的解釈法として発展させ、後代の聖書解釈の伝統に大きな影響を与えたのである。

続いて第二章以下では、オリゲネスが行った対異教哲学、対グノーシス異端思想、対ユダヤ教論争を順次扱っており、キリスト教に加えられた復活論批判に対して、オリゲネスが聖書解釈を通じてどのように答えたかを『ケルソス駁論』や彼の聖書注解を通じて検

討した。テキストの考察を通じて明らかになったのは、プラトン主義者の論敵ケルソスが当時流布していた異教やユダヤの民間伝承資料を駆使しながら、キリスト教の教説を激しく攻撃しているのに対して、オリゲネスはケルソスの批判を冷静に受け止め、聖書テキストに基づいて批判の妥当性について検討し、読者をキリスト教の死生観や復活論についての正しい理解に導こうとする姿勢を貫いていることである。

グノーシス主義諸派とオリゲネスとの間で交わされた復活をめぐる論争の考察においては、復活に関する聖書伝承のなかでも特にパウロの復活をめぐる記述に焦点を当て、初期キリスト教の復活理解の変遷を辿りながら、彼の復活論の特徴について考察した。その結果、彼の復活理解はギリシア思想における魂と身体二元論的伝統とも、また独自の救済神話に基づくグノーシス主義の脱身体的復活論とも相違していたばかりか、当時の正統的教会が展開した復活の肉体性を強調する復活論理解とも異なる「終末論的様態変化」であったことが明らかになった。グノーシス主義諸派がしばしばパウロを引用していたために、2,3世紀の護教論者たちはパウロの復活理解よりは、福音書に見られる反仮現論的復活理解を肉体の復活の教義として発展させた。それゆえ彼の聖書解釈に見られるパウロ主義は当時の教会としては例外的な位置を占めることになり、彼の復活理解は後代のオリゲネス論争の要因の一つともなった。オリゲネス神学の評価を巡る問題は、当時のパウロ受容の状況とも複雑に関係していたと言える。

最後の第六章では、聖書解釈者オリゲネスが後にどのようにしてキリスト教会にとって危険な異端者とみなされていったのか、その過程を反異端論者として知られる4世紀のサ

ラムスの主教エピファニオスの『パナリオン』64を中心に検討した。オリゲネスは後世の修道制的禁欲主義に多大な影響を及ぼし、4世紀にはオリゲネスをめぐる長期にわたる論争を引き起こすこととなったが、一連のオリゲネス論争の火付け役となったのがこのエピファニオスである。彼は肉体性を軽視するような極端な禁欲実践を行う修道士たちの神学の源泉をオリゲネスに見出し、後続の異端の祖とみなして彼の思想を徹底的に断罪した。しかし一連のオリゲネスに対する彼の論争は必ずしもオリゲネス自身の神学を扱ったものではなく、教会政治的意味合いを強く持っていたために、オリゲネスに関する証言や教説が大きく歪められた形で伝えられていったのである。この問題との関連で、昨年1月に「アレクサンドリア」の題名で日本でも公開にされたアメナーバル監督による2009年のスペイン映画AGORAに言及したが、この映画はローマ帝国によって国教化された後の異教とキリスト教、ユダヤ教との関係の変化と混乱を初めて映像化し、史実に即して可能な限り克明に描いている。日本での公開に先立って私は字幕のチェックや劇場用パンフレットに当時の宗教・文化的状況についての解説を執筆したが、女性哲学者、天文学者として名高いヒュパティアが、暴徒化したキリスト教徒によって惨殺される出来事は、アレクサンドリアの多文化主義の終焉を物語る象徴的な出来事であった。

オリゲネスの問題を時代状況との関連で見れば、彼が生きた時代はまさに非合法宗教とみなされていたキリスト教が周辺世界に対して自他ともに宗教的寛容を求めた時代であり、オリゲネスは諸宗教の平和・共存を主張するアレクサンドリアの宗教多元主義の実例であった。オリゲネスの聖書主義は聖書に基づく限り多様な解釈の立場に余地を残すもの

であり、テキストの比較を通じてヘレニズム諸思想やユダヤ教との対話を可能とするものであった。ヘレニズム世界の文化状況に適応しながらアレクサンドリアの多文化主義的状況のもとに発展したキリスト教が、後にキリスト教の国教化政策に伴ってこの地の多文化主義に終止符を打つ結果になったことは、歴史の皮肉と言えるだろう。

### III

冒頭で述べたように、『聖書解釈者オリゲネスとアレクサンドリア文献学』の刊行のための校正や索引作成作業を行っていた時期がちょうど東日本大震災と重なったために、私は古代アレクサンドリアの宗教思想を研究する意味について問い直すこととなった。2006年に私の生れ故郷である仙台にある東北学院大学に職を得た時に、近いうちに宮城県沖地震が来ることを予想し、それなりに住まいの地震対策をしていた。しかし3.11の地震の際にはこれまでに経験したことのない激しい揺れが長く続き、まるでジェットコースターに乗っているかのようにであった。机の下に身を置きながら目にしたのは、食器棚から次々に食器が飛び出しては割れ、棚上の電子レンジやコピー機が宙をふわりと舞って落下する光景であった。部屋は一変して散乱した食器や本で足の踏み場がない状態に変わり、奥の寝室ではベッドの真上に重い天井板が落下していた。これが夜であったら私は助からなかっただろう。

しかし窓の外の景色は一見普段と変わらない様子で、市内の建物の崩壊も見られなければ火の手も上がっていない。直ちに近く of 東北学院大学キャンパスに向かった。建物からは多くの教職員や学生が出てきて、職員の指示に従って次々に道路を隔てた向かいの東北大学のテニスコートに避難している。皆不安

な面持ちで知人と安否を確認し合い、これが予想されていた宮城県沖地震だろうかと話合う。時に地面が揺れ、天候が急変して穏やかな晴れから一挙に雪の散らつく曇り空になる。テニスコートにビニールシートが敷かれ、重要書類が職員の手で運び出されてくる。学内の建物に今後立ち入らないようにとの指示を受け、一同は解散となった。私は大学生の娘と共に近くの小学校に避難することにした。建物を揺るがす強風と凍てつく寒さに不気味な余震が加わり、避難市民で溢れる体育館で忘れられない一夜を過ごしたが、特に携帯ラジオから次々に流れるニュースに耳を疑った。大津波に襲われた仙台近郊の荒浜海岸に多くの遺体が打ち上げられているという。

さらに今回の地震がマグニチュード9というこれまで予想だにできなかった規模であることも。この日を境に東北の人々の暮らしは一変し、食料や日用品は不足し、ライフラインの復旧までかなりの時間を要することになる。

翌週には校正ゲラを持って山形経由で夫の住む岡山に避難した。その間職場の教員が手分けをしてそれぞれの所属学科の学生の安否確認を行った。県外からの方が通信しやすかったために連絡の取れない学生には岡山から連絡を取ることができ、まずは学科に属する学生全員の無事を確認してから、大学再開までの期間を本書の校正作業に費やすことができた。テレビで見た津波の光景は現地で実際に震災を体験した者にとっても想像を超える衝撃であり、私はゲラの校正作業を進めながら、何が起ころうと人類の知的遺産を継承し、後代に伝えることは人文学に携わる人間の責務であることを自分に言い聞かせねばならなかった。

研究室を片付けて新学期に備えるようにとの大学からの指示で3月29日には仙台に戻り、

4月末の新入生対象オリエンテーションまでの期間を震災後に立ち上げられたボランティア・ステーションで教職員や学生と共に支援活動をする。自らも被災しながらステーションの活動に参加した多くの教職員と学生の姿に勇気もらい、復興への希望が確かなものとなってゆく。最初の時期には体育館に届いた大量の支援物資の仕分けと送付作業を中心に、その後は工学部のある多賀城キャンパスでこの地域の多くの犠牲者を追悼するキャンドルナイトや、被災地を訪れたベトナムの高校生やオーストラリアの大学生との交流会や、夏休みに行われた大学間ボランティアの総括シンポジウムなどの様々な行事に参加した。来年度からは私の所属する学科のカリキュラムにボランティア関係科目が組み込ま

れているので、地域の再生や被災者のメンタル面の支えなど、より専門的な活動が展開されることと思う。

今回の震災では東北の人々が互いに助け合い、落ち着いて行動していたことが至る所で確認されたが、それは何度も震災を経験した地域ゆえに日頃から心の備えがあったからだと思う。今後は被災地を訪れるボランティアの減少が懸念されるが、被災地域の復興や津波で住まいや生活の基盤をうしなした被災者の生活支援、愛する家族や友人を津波で一瞬にして失った方々の心の癒しや亡くなられた方々の鎮魂の問題が重要な課題となっており、引き続き全国の多くの大学関係者にご協力をお願いしたいと思う。